

「今日の説教、聴き手のために」 2008/7/6 明治学院教会(120)

(このプリントは毎週作っているものです) 岩井健作

「求められたら、断れない」

マタイ7:1~11

- 1、「求めなさい、そうすれば……」。これはマタイ、ルカに共通なので「イエスの語録集(Q)」で伝わったイエスの言葉です。マタイとルカは同じ言葉に自分の文脈の主張を盛り込みました。マタイは「山上の説教」(5-7章)で用い、「何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすればこれらのものは、みな加えて与えられる。だから、あすのことまで思い悩むな」と、求めるべきは「神の義」でありつつ、「あなたがたの天の父は、求める者に良い物をくださるにちがいない。」という「よきもの」に重点をおきました。「義」は神様との関係ですが、関係の結果をも含めて、恵みの出来事「良い物」(神のみ旨に適った「実践」)を「求めよ」との壮大な促しです。
- 2。ルカは「求めよ」を「主の祈」を熱心に祈る事に結びつけています(11:9-11)。祈りは神との関係です。神との関係を現わすのが、聖書では「聖霊」です。ですから、ルカが「求めよ」という時には、「聖霊を求めよ」ということになります。「聖霊が祈りを成就する」というのが、ルカの主張です。聖霊を「求め」ることが祈りの根本なのです。ですからルカは、マタイが「良い物」といっているところを、はっきり「天の父は求める者に聖霊を与えてくださる」と言っています。「義」と「聖霊」との、手掛かりの違いはあれ、共に、「求める」とは究極において「祈りを含めて実践」であり、「祈りの基礎としての聖霊」であります。マタイの「求めよ」は外に向かい、ルカはより内に向かっていても言えます。
- 3、マタイは「パンと石」「魚と蛇」「卵とさそり」で現わされた卑近な親子関係で「求め」の結果を示します。パンを求める子供に石を与える親はいない、という経験は、昔から変わらないものだと思います。大事なものは日常の体験が「神の事柄」の比喩になっている点です。体得的な事柄の中で、「神」はご自身のことを気付かせられます。またその経験の中にこそ宿り給うということが、大切なことです。
- 4、私たちは本当に求められたら断れないで、自分でもお人好しだなと思うくらい、引き受けてしまうのが私たちの現実です。その経験から類推して「求める」ことに切に生きて、行きき詰まや、閉塞した状況を破って、恵みに応えるものでありたいと思います。内面的祈りの方向に向ければルカ的であり、実践の方向に向ければ、マタイ的であります。
- 5、献体が最後で、告別、追悼式はしないと遺言を残して帰天した、友人金井愛明さんは、マタイ的な実践を生きた「釜ヶ崎」の聖者でした。